

文 教 委 員 会

令和5年8月29日 ~ 31日

北 海 道 旭 川 市
北 海 道 札 幌 市
北 海 道 千 歳 市

委 員 長	須 賀 精 二	副 委 員 長	所 隆 宏
委 員	中 野 ヘンリ	委 員	五十嵐 まさお
委 員	勝 山 まゆみ	委 員	太 田 彩 花
委 員	佐 野 朋 子	委 員	間 宮 由 美
委 員	中 道 貴		

令和5年度 文教委員会 所管事務調査報告書

1 日 程

令和5年8月29日（火）～8月31日（木）

2 視察先及び行程

北海道旭川市、札幌市、千歳市

3 調査項目

(1) 旭川市北彩都子ども活動センターASOBI-BA（あそびーば）について

《視 察 先》

旭川市北彩都子どもセンターASOBI-BA（北海道旭川市宮下通 14-3-1141）

〔概要〕

- (1) 人 口 321,975 人（男：149,336 人 女：172,639 人）
- (2) 世 帯 数 世帯
- (3) 面 積 747.66 k m²
- (4) 予 算 額 1,692 億円（令和5年度一般会計当初予算）
- (5) 議員定数 34 人

《視察日時》

令和5年8月29日（火）

《旭川市の取組み》

子ども及び青少年の活動支援として子ども自身の主体性や自律性を育てていくため、子ども同士の交流や多様な経験、教育など学びの機会提供に努めている。また、放課後の子どもの居場所づくりを始めたとした活動の場、地域の交流の場も担っており、小中高生などの多様な年齢層の子どもが集い、ダンス、クライミングウォールなど、様々な活動を行うことで子供の豊かな感性や創造力などの育成も兼ね備えている施設である。

《委員・会派等の所感》

- 近隣の団地は、18歳以下の子どもがいる家庭が優先で入れることもあり、当施設は、青少年の活動の拠点として、子育て世代の交流の場としての利用率が高かった。また、自治体には特別料金で利用ができるようになっていました。山岳部など高校の部活動や、通信制の学校の体育の授業などの利用もあり、幅広く活用されていた。

一方で、市民への認知度をあげるため、学校とコラボレーションした展示会やイベントなどの活動への取り組みなど、多くの方に活用してもらい、地域の活性化に繋げていくための工夫もされていた。

「あそび〜ば」という名称とロゴは、地域の子どもたちから募集して決定したそうで、地域に密着し、幅広い世代の地域コミュニティの拠点になっていると感じた。

- 旭川市にある「北彩都こども活動センター（愛称あそび〜ば）」は、北彩都市営住宅敷地内にあり、中高生や大学生の活動拠点、乳幼児を連れた保護者の方の交流の場、近隣住民の集会所としての機能を兼ね備えた施設として、旭川市が整備した施設である。

設備としては、自主学习やミーティング・絵画や写真などの作品発表に使うギャラリーラウンジ、バスケットボール・卓球・クライミング・ダンス練習などのスポーツの他、講演会・イベントなどでも使用可能な運動室、楽器も音響資材も完備されている音楽室、勉強会や会議・赤ちゃんサークルなど様々な用途に使える和室、屋外には円形ステージ及び半円広場があり、青少年の利用を優先しているが、一般（大人）利用も歓迎している。利用料金も青少年は一般の三分の一程度で利用でき、実際に半数の利用者は青少年が占めている。

また、クライミングウォールは山岳部の活動に、運動室は通信制高校の体育の授業にと、当初意図していなかった利用もあり役立っている。

イベントも活発に企画され、時間帯や曜日により様々な市民が集う地域の憩いの場となっているが、近隣住民の利用が多く、市内全域の認知度アップが課題となっている。

ここまで様々な機能が一つに凝縮した施設は大変魅力的であり、本区でも地域住民の日常生活がさらに充実するような施設機能の充実のために参考にしていきたい。

- （株）こどもクラブグループの指定管理。最初は、数箇所からの応募があったが、2回目は、こちらのグループ一社の応募とのこと。

18歳以下がいる家庭が優先的に入居できるという、子育て世代に特化した団地ができる時に、建設することになったとのこと。そのような考え方の団地も素晴らしい。

個人でも団体でも使うことができる、運動室、音楽室、和室、ラウンジなどがある。ふらっときても良い場所であるが、来た時に、すでに専用で使われていたときは、待つか帰るかとなるとのこと。HPでも確認できるそうだが、来てから空いてないことがわかることも往々にしてあるとのことなので、システム化が望まれるところだと考える。

子育て支援の和室には、赤ちゃんが一人で座れるようになったので初めて来たというママと赤ちゃんが、他のママたちや指導員のお二人の方と、遊んだりお話ししたり。ゆったりとした時間を過ごしていた。泥んこ遊びや、火を使っただけの遊びができるかどうかを聞いたが、それはできないとのこと。

基本は、室内となるので、運動室には、クライミングウォール、バスケのハーフコート、卓球台もある。一人で、あるいは、団体と、家族と利用されている。土地も広いので、野外での泥んこ遊びなどができると、自然とのふれあいの中での成長もあり、ぜひ広げていただければと考える。青少年の活動、子育て支援、地域住民の日常生活の充実に寄与するためということを目的としてい

るので、子どもだけでなく、大人も利用できる。

江戸川区にと考えた場合に、今あるコミュニティ会館や、共育プラザなどが当てはまると思うが、大人も子どももというごちゃ混ぜの利用の仕方、そのことを改めて考えてみても良いかもしれないと考えた。

- 子育て中の住民が中心に住んでいる北彩都団地の中につくられた、青少年の活動拠点となる施設である。体育館にはクライミングウォールがあり、200円でシューズをレンタルして利用することができる。ダンスなどに最適な壁面鏡やバスケットゴールが完備されており、時間によって卓球台も利用できる。床は転倒してもけががないよう、やわらかめに設計されている。それもあってか、館内で起こったけがの件数は比較的少ない。

キーボードやドラムセットが完備された音楽室もあってバンド練習も可能である。また、施設主催による出演料無料の高校生向け音楽イベント「旭川青春音楽祭」も開催。

和室では定期的に子育てサロンを開催し、乳幼児を連れた保護者達が支援員とともに交流を図っている。市内の他の場所にこのような施設は作らないのかと尋ねると、少子化や経費などの課題があり難しいという問題がわかった。しかし、子どもの遊び場であり、また青少年の放課後などの居場所として運動や文化・芸術活動に触れてもらい、子どもたちの体や心の健全な育成に役立てられ、安心して子育てできる環境づくりにもなるこのような施設を拡充することは、少子化の今だからこそ重要であると考えた。江戸川区でも、「子育てするなら江戸川区」のスローガン通り、共育プラザなど今ある施設を青少年の活動拠点としてさらに充実させ、葛西南部地域への拡充など子どもたちの活動や夢を支える環境を整えていきたい。

- 旭川市北彩都子ども活動センターASOBI～BA（あそび～ば）は、中高生や大学生の活動拠点、乳幼児を連れた保護者の方の交流の場、近隣住民の集会所としての機能を兼ね備えた施設として旭川市が整備した施設である。

旭川駅から徒歩約12分、駐車場32台利用可能と、立地や北海道の都市の特性の観点から利便性は高そうに感じられた。見学した時間帯が平日の日中であったため、メインの利用層である中高生の利用する姿を見ることはできなかったが、乳幼児とその保護者が、子供を遊ばせたり、地域の方と交流する姿を見ることができた。簡単なロッククライミングの設備や、防音を完備した演奏室などは特徴的であった。

一方、屋内のバスケットコートはハーフコートであったり、屋外のステージなどは周辺の住居環境の関係から中々利用がしづらいという課題を抱えているように感じた。中高生や大学生の活動拠点を標榜するのであれば、今後は例えば、Wi-Fiの完備や軽食の提供など、よりメインターゲットにとって使いやすい施設に変化していき利用が進むことを期待するとともに、江戸川区においても、例えば児童館（共育プラザ）等の公共施設におけるWi-Fiの普及などを提案していきたい。

- 当施設は、軽音楽ができる防音の部屋や、ダンスができる大きな鏡、ボルダリングなどユニークな設備や環境がある点は面白いと感じた。また、子育ての方用に預けられるスペースもあったのは良かった。ただ、やはり賑わっている様子があまりない施設ではあった。

地方ということでそもそも人口密度の問題もあると思うが、話を聞いたところこの施設自体そこまで市民に浸透させられていないのも課題とのことだった。

設備や環境が良くても、立地が悪ければ子供たちだけではなかなか施設に来ることも難しくなってしまう。その点の事前予測がどの程度出来ていたのか疑問に残った点であった。

周囲に団地があるところに建てられたので、もしその団地にお住まいの方をメインターゲットに想定していたなら、どんな設備だったら足を運びたいか？など事前にアンケートを取ったりして住民とともに施設の完成を迎えていくといったプロセスを踏めたら、ニーズを外すリスクも軽減できて、完成したら「自分たちが携わった施設」ということで、より思い入れを持ってもらうことなどできたのではないかと思った。

また、それは地域住民だけでなく、オンラインを通じてやってみるという手もある。検討している設備や環境を候補に出して、投票してもらうなどといった取り組みは面白いのではないかと考える。勝手に出来上がった施設ではなく「自分たちの施設」というふうに思ってもらえる可能性があるし、事前の周知や宣伝にもなる。

江戸川区であれば、区内にスポーツセンターやコミュニティ会館は複数存在し、それぞれの距離も地方ほど遠くはないので、「他の施設にはない設備」を導入した場合、その地域の住民だけでなく「この設備はこの施設だけ」といったところをいかに周知させていくかが必要になってくるだろうと考える。

(2) 札幌市図書・情報館について

〈視 察 先〉

札幌市図書・情報館（所在地：北海道札幌市北1条西1丁目）

〔札幌市の概要〕

- (1) 人 口 1,959,833人（男：916,185人 女：1,043,648人）
- (2) 世 帯 数 995,195世帯
- (3) 面 積 約1,121k㎡
- (4) 予 算 額 1兆2,442万円（令和5年度一般会計当初予算）
- (5) 議員定数 68人

〈視察日時〉

令和5年8月30日（水）

〈札幌市の取組み〉

札幌市図書・情報館は、従来の貸し出し機能に重点を置いた図書施設とは異なる調査や情報提供に特化した「課題解決型図書館」として整備された。

当施設は、「おしごとから、わたくしごとまで」をコンセプトとし、様々な人が利用しやすい気軽に寄れて頼りになる知的空間で、貸出機能に重点を置いた既存の図書施設とは異なる、図書館として計画され、「WORK」「LIFE」「ART」の3つの

エリアに分けて分野ごとに文献を置いて利用のしやすさを重視している。また、ひとに寄り添う本棚を目指し、オリジナルテーマを採用しており、図書をすべて館内利用とし、貸し出しをしないため、いつ来ても閲覧可能であり、いつでも最新の図書・情報が手に入るようになっていきます。札幌市図書・情報館のコンセプトは「入りたくなる、隅々まで行ってみたくなる、また来たくなる」という3つを軸にしている。

《委員・会派等の所感》

- WORK、LIFE、ART に特化した課題解決型図書館で、起業を目指す方のためのもよろず相談の拠点となっていて、無料経営相談も行われている。図書館でありながら、館内で会話やパソコンワークができるスペースもあり、会議などでも利用が可能で、平日にもかかわらずほぼ満席なくらい多くの利用者がいた。

通常の図書館と異なり、本の貸出しは行っておらず、常に新しい書籍に入れ替えをすることで、利用者に最新の書籍、情報を提供することができ、事前予約で読みたい本、座席の確保もでき、知りたい情報の本をスタッフの方が一緒に丁寧に探してくれるなど、利用しやすい環境が整えられていた。

利用時間が長くなるため、学生の自習での利用はできないとのことだったが、建物内のフリースペースで学習している学生も多く見受けられた。

読書図書館と情報図書館として目的を分けることで、それぞれの特色を生かした施設の取り組みは、本区のこれからの図書館運営のあり方について大変参考になった。

- 「札幌市民交流プラザ」の中にある「札幌市図書・情報館」は「仕事や暮らしに関する図書・情報提供」「札幌の魅力発信」「知的空間の創出」を行っている。図書・情報館所蔵の図書は館外への持ち出しは出来ない。

1階フロア(300㎡)は全席自由席、札幌・北海道の魅力に関する図書を展示する他、サロンでは仕事や暮らしに役立つセミナーが開催される。また、札幌市内の他の図書館から取り寄せた図書の貸し出しや返却が出来るカウンターがある。2階フロア(1200㎡)はWORK LIFE ARTの3つのエリアと会話OKで仕事や打合せに活用できるグループエリアの他、データベース閲覧席もある。机に向かえる座席は予約制で、入口の端末で席を予約し使用する。ソファ席は自由席となっている。

書架が低めに造られており、フロア全体が見渡しやすい。図書の陳列も見やすく分類されており、つい手に取って読んでみたくなる設えとなっている。平日の午後に伺ったが多くの方が利用していた。利用者の7~8割が20~50代の方。書架から取った図書は返却コーナーに返すことにより、どの図書がどれだけ利用されたかデータ化される。

札幌市には中央図書館の他、地区図書館、区民センターや地区センター等の図書室など合計47カ所で図書の貸し出しを行っているため、「図書・情報館」はビジネスや観光の情報発信機能に特化させることが出来、魅力ある空間となった。市内の本屋さんへの影響については、かえって本を買う客が増えていると云う事であった。

- 札幌市民交流プラザという複合施設の中の1階2階部分につくられた「情報

館」は、その隣にある「MORIHICO.」に、「図書・情報館」の本を持ち込むことができる。「働くまでも、働いてからも」「はたらくをらくにする」

「支えになりたいと私たちは考えています。(札幌市図書・情報館)」とかかれた情報館では、借りることはできず、そこでの閲覧だけとなるが、そのために、最新情報をいつでも手に取れるようになっている。情報館の図書の種類も豊富であるが、驚いたのは、新聞である。小さな新聞社や業界新聞などもすべてそこにいけば手にとってみるができる。

ほぼすべての業種の、働くことに関する「寄り添う本」を置いている図書館。それが札幌市図書・情報館であった。

- ビジネスマンや観光客向けの図書や情報の提供、課題解決に特化した図書館である。全体的に温白色に近い照明の下、読書も交流もしやすいという印象。

1 階フロアではデジタル映像や図書で地域の魅力を発信、2 階フロアでは従来の図書館とは違い、日本十進分類法の並びではなく WORK (ビジネスマナーから起業まで)、ART (芸術全般)、LIFE (医療、家事、法律、人権など) といった大きなくくりのテーマごとに配架され、圧迫感のない書棚配置、本の表紙を見せての並べ方など、探しやすく、また書籍に興味を持ちやすくするよう工夫が凝らされている。

さらに、会話が可能で、インターネットで事前予約が可能な座席、無料 Wi-Fi とコンセントが設置されたコワーキングスペース、ミーティングルームなど、働く人にはうれしい設備が整っている。リサーチカウンターではレファレンスサービスに加え、経営者や起業を検討する人への相談窓口も定期的に設置するなど、市内の事業者の具体的な支援にもつなげられるサービスも受け付けている。

これらの要素は、「2030 年に向けた江戸川区立図書館の目標と基本方向」で示されたサービス、コレクションの具体的な取り組みの方向性とも合致するところがある。これを踏まえた上で「船堀駅周辺に図書館を」といった区民の声にこたえ、働く人に向けてだけでなく地域の魅力発信と多様な区民の読書、交流、学習の拠点となる図書館を実現したい。

- 『はたらくをらくにする』をコンセプトに掲げ、ビジネスパーソンを支援する 図書館である。札幌駅から徒歩約 12 分の場所に位置し、まさに北海道のビジネスの中心のような立地に利便性の良さを感じた。入口から 2 階まで見学し、利用者用のパソコンスペース、カフェ、関係機関の相談窓口などの設備や展示物の説明を受けた。

1 階のサロンは自由席となっており、開放的な空間に、北海道・札幌の魅力伝える図書や雑誌があり、セミナーやイベントを不定期で開催。カフェと一体の空間となっているので、コーヒーを片手に読書を楽しめる空間となっていた。2 階のリサーチカウンターでは、起業、経営、法律などの専門機関による出張相談窓口も定期的に開かれており、他の図書館にはない特徴と感じた。課題解決に役立つため、いつでも最新の図書・情報が手に入るように、あえて貸出を行わないなどの工夫がなされていた。

『はたらくをらくにする』をコンセプトにするのであれば、時代のニーズに合わせてテレワーク専用スペースの提供などが今後求められていくのではないかと感じた。

○ 札幌市という中心都市の中にあり、立地も良い環境。利用者数も多く、活気が感じられた。館内の内装も綺麗で居心地の良さそうな施設と感じた。

個人的に特に気になった点は「ビジネス層へのアプローチ」の部分。図書館というやはり学生や地域住民の方のための施設という印象だが、この施設は全く違った印象。書店に置いてあるようなビジネス書を普通に図書館機能として充実させている点は今までの図書館の概念にはないものだった。

これからの時代は働き方も多様化してくる。一つの企業に長く勤めている時代から、副業をするのがスタンダードになっていたり、共働きも増えていたり。そういった時代背景に合わせて行政がアイデアを提供できる機会を増やしているように感じたのが個人的にはとても好印象だった。

講師をお呼びしての講習があったのも非常に面白い取り組みである。本や座学だけでの学びではなく、実際に困っている道のプロと接する機会を作っているのも良い点。役所に来られてもお答えできない問題なども、専門家の方が答えてくれるなら役所側も市民にとってもメリットがあると思う。

どんな講師を呼んでほしいか、どんな相談がしたいかといったこともアンケートを取ってみたりするのは良いかもしれない。ニーズに合った講師を呼べるし、市民（区民）のお困りごとを知る機会も増える。困っている人の相談に乗るためだけの行政ではなく、市民（区民）が自立して生活していくためのスキルや知識を身につけてもらうためのお手伝いをしていくというのはとても良い取り組みだと思う。

館内に街の良い景色のムービーなども流れており、自分たちの住んでいる街に愛着や誇りが持てるような雰囲気作りをしているのも好印象だった。

江戸川区は、札幌市のように人々が行き交うビジネス街という町ではないので、全く同様の施設が必要とは思わないが、新庁舎が始まるのに伴って検討してみしてほしい機能はあった様を感じる。

一人一人のビジネスマンには良い環境だったが、江戸川区ならもっと地域のつながりや横のつながりを作ってあげられるような施設にできると良いのではと感じた。

(3) 防災学習交流センター「そなえーる」について

〈視 察 先〉

千歳市防災学習交流センターそなえーる（所在地：北海道千歳市北信濃 631 番地 11）

〔千歳市の概要〕

- (1) 人 口 96,965 人（男：49,182 人 女：47,783 人）
- (2) 世 帯 数 51,926 世帯
- (3) 面 積 約 595 k m²
- (4) 予 算 額 490 億 7 千万円（令和 5 年度一般会計当初予算）
- (5) 議員定数 23 人

《視察日時》

令和5年8月31日（木）

《取組み》

千歳市防災学習交流センター『そなえる』は、災害を「学ぶ・体験する・備える」をキーワードに、いろいろな災害の疑似体験をしながら、防災に関する知識や災害が発生したときの行動を学ぶことができる。

また、防災講座や救急講習、自主防災組織の訓練など防災学習の拠点施設としても活用している。

防災学習交流センター「そなえる」は、千歳市防災学習交流施設に中に入っており、施設内は、防災に関する関心を高め、防災に対する知識・技術が習得できる施設消火訓練・救出体験訓練ができる「学びの広場」、災害時を想定した野営生活訓練ができる「防災の森」の3つの施設で構成されている。

《委員・会派等の所感》

- 「学ぶ・体験する・備える」をキーワードに様々な災害の疑似体験ができ、防災に関する知識を学ぶことができる防災学習の拠点施設として活用されていた。

地震体験コーナーでは、過去に起きた地震の揺れを体験することができ、東日本大震災の時の恐怖がよみがえった。煙避難体験コーナーでは、真っ暗な中で鍵のかかっていないドアを探して避難をするのに、周りが見えない状況ではパニックになってしまい冷静に行動ができないことを体験した。

隣には「防災の森」では、災害時を想定した野営生活や訓練もできる施設もあった。

日頃、地域の防災訓練には参加させていただいているが、改めてその大切さを実感したとともに、今後、より一層多くの方に参加していただき、災害に対する関心、意識を持ってもらえるよう周知していきたい。

- 災害の疑似体験や防災学習を通じて意識を高めることができる本施設には、貴重な各種装置が常備されていた。特に、コンセントからの発火現象を見ながら火災の原因を学習する予防実験コーナーや、ホテル等に設置されている「救助袋」で避難体験できるコーナーなど、普段は経験できない施設コーナーが充実していた。

また、小中高生から一般対象の防災学習メニューが、それぞれの成長段階に応じて用意されている。消火体験から、応急担架や段ボールベッドの作製、救急講習、災害時のトイレ、避難所、防災資機材の取り扱いなど、充実したメニューとなっている。

一人一人が災害を体験し、学び、そして備える為に、毎年、防災学習等を繰り返す事は、いざという時にたいへん役立つ訓練であると思う。

今回、本施設を中核施設とした三つのゾーンも拝見した。総合防災訓練などを行うAゾーン。消火体験や救出体験等を行うBゾーン。そして、最も広い3haのCゾーンでは、サバイバル訓練や野営体験、河川訓練など、広場を存分に活用した体験活動はたいへん充実されていた。13年目を迎えられた「そなえる」を中核施設とする「千歳市防災学習交流施設」を、本区でも参考にさせ

て頂き、災害対策の一層の強化のために反映させて行きたいと思う。

- 各地に防災館はあるが、この優れている点は、「学習交流施設」となっていることかと思う。単独または、様々な組織において、相互に連携が取れて、防災学習、防災訓練の実施ができる施設となっている。地震体験コーナーでは、単に震度幾つの揺れの体験ということではなく、東日本大震災の揺れ、胆振東部地震の揺れ、熊本地震の揺れなど、過去に起きた大地震の揺れを体験することができる。揺れ方が違うことを知ることで、地震の恐ろしさをより実感できることにつながると感じた。

予防実験コーナーでは、コンセントについてのホコリやそれが濡れた時に起こる火災の状況を再現。さらに怖いのは、コンセント部分が燃えたとしても、例えばそこにつながっている電気や冷蔵庫などの電源は切れないということ。だから、見えないところにコンセントがあれば、燃えていることもわからないままになってしまう。また、電気の延長コードは、巻きついたまま使うことが普通と思っていたが、延長コードはすべて長く出して使わなければ、出火するという事など、身近な間違いや知らなかったことによる、火災の原因を学ぶことができる。

A、B、C、それぞれの野外のゾーンでは、訓練、体験ができ、そして、何よりこの防災学習施設は、災害時には、災害対策の拠点として使用ができるということになっていることで、実際の災害時に活かせる行動につながることを実感した。

- ガラス張りの広大な施設を見学し、2階に上がると市や消防、自衛隊の災害対策の取り組みが書かれたパネルや避難所内、車中泊など様々なシーンで必要な対策法を書いたポスターと実際の防災備蓄品が、具体的で子どもでもわかりやすい解説とともに展示されていた。

奥に入ると地震体験コーナーがあり、人が7人ほど乗れる台の上に立てられた棒につかまるというシンプルなつくり。胆振東部地震や東日本大震災、阪神淡路大震災、関東大震災など実際に日本で起こった地震の揺れが再現された。棒をつかんで立っているだけなので揺れをよりダイレクトに体感することができた。

煙避難体験ブースは、煙の中で開かない扉と暗闇の中を中腰で抜けなければならず、姿勢が高くなるとブザーが鳴るなど、リアルで緊迫感のある内容。非常口ランプや矢印の意味にも改めて気づかされる貴重な体験であった。屋外にも、「防災の森」という、災害時の野外サバイバル訓練もできるスペースがある。

千歳市のような広大な敷地を使ったやり方を江戸川区で再現するのは難しい点もあるだろうが、可能な限りこのように災害を実際に見て学んで体験できる環境を区民に提供できれば、子どもたちや住民の防災への意識もより効果的に高められ、実践につながられるのではないかと考える。

- 千歳市防災学習交流センター『そなえーる』は、災害を「学ぶ・体験する・備える」をキーワードに、いろいろな災害の擬似体験をしながら、防災に関する知識や災害が発生したときの行動を学ぶことができる施設である。施設見学の冒頭、北海道における災害の歴史を映像で振り返った。

記憶に新しいのは胆振沖地震であるが、地震そのものの大きさもさることな

がら、その後起きた北海道全域の停電、“ブラックアウト”は大きな問題となり、TVや新聞などでも広く報じられた。火力発電所が地震の被害で一部の機器が故障して停止したこと端を発し、送電線の断絶、UFR動作（周波数低下）による風力発電所の停止など様々な要因が合わさって大規模停電に至った。

東京においても、首都直下型地震などでブラックアウトの可能性は十分想定されるため、電力会社との災害時の対応の確認などの重要性をあらためて感じた。

また、地震体験は単なる震度の設定だけでなく、過去の様々な地震を模した揺れは、実際の地震発生時の想定に役立った。トラッキング火災の展示や、煙で充満した避難訓練体験などは、知識はあっても経験したことがなく、市民の防災意識の向上に資する施設として非常に有用であると感じた。

自衛隊施設が多く、自衛隊関係者が人口の約25%を占めるだけあって、防災意識の高さを感じた。私も防災士、そして元自衛官として防災政策について引き続き積極的な提言をして参りたい。

- 防災関連の施設ということで、災害リスクの高い江戸川区にもあってほしいような施設だなというのが率直な感想であった。地震の体験ができるものがあったが、リアリティがあり、過去の災害の歴史などを地域住民と共有できるのは良いことだと思う。

収益を上げることなどが目的の施設ではないと思うが、レポートしてくれる住民はどれだけいるのかは疑問に思ったところ。どうしても展示館や資料館といった施設は学校とか団体での来客に依存してしまいがちなのがネガティブなポイントだと感じた。

もし江戸川区に似たような施設を作るとしたら、防災施設×「江戸川区の歴史や歩み」といったところをもっとフォーカスしても良いのではと感じた。江戸川区においては、水害の歴史や治水の歴史がある。そもそもなぜそんな危険地域だった町で私たちはこうして暮らしているのか？治水の歴史や埋め立ての歴史など、普通に生活しているだけではなかなか触れる機会がない。地域愛や地元愛を育み、地域に根付いた人たちを増やしたい。そういった願いはどの町でも共通の願いとしてあると思う。

歴史を知ること、先人たちへの感謝が芽生え、地元愛や地域愛は育まれる。子ども時代からそういうことを知ること、いつかはこの町のために貢献できる大人になろうという精神性を育成できるのではないかと思う。

また、高齢の方たちにとっての憩いの場としての機能などを持たせられたら良いのではとも思う。実際に足を運んでくれる子どもたちに対して、施設のスタッフが決まった案内をするよりも、直に江戸川区と歴史を歩んできた人たちから話を聞ける機会などを作れたらより良いのではと。それは、高齢の方たちにとっても生きがいや存在意義を感じてもらえる機会にもなる。

今後様々な災害に備えた知識を住民に啓発していくことと、知識や意識の提供だけではなく、防災グッズの提供などは行政側からできる災害対策として検討しても良いかもしれない。

※ 報告書の作成にあたっては、旭川市、札幌市、千歳市の各々から提供を受けた資料を参考にしました。